

Title	青森県最花貝塚遺跡B地点出土の縄紋土器：一九六四年調査出土標本の整備と分析
Sub Title	Analysis of Jomon pottery from the 1964 excavation of location B of the Saibana shell-midden, Aomori prefecture, Japan
Author	安達, 香織(Adachi, Kaori)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.569(569)- 599(599)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 民族学考古学 挿図 挿表
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0569

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青森県最花貝塚遺跡B地点出土の縄紋土器

——一九六四年調査出土標本の整備と分析——

安達 香織

はじめに

慶應義塾大学民族考古学研究室の未報告資料のなかには、未整備の地域・時期の縄紋土器型式編年研究に重要な意味をもつ標本がいくつか存在する。近年、そうした未報告所蔵標本の整理が進められるなかで、とくに一九六四年に調査された青森県むつ市最花貝塚遺跡から出土した縄紋土器の充実した内容が明らかになってきた。

このため、二〇〇九年に筆者らは、最花貝塚遺跡の三つの地点（A・B・C）のうちA地点の出土土器を公表した（安達・安藤二〇〇九、安達二〇〇九）。A地点出土土器は、技法・形態・装飾に固有の特徴があり、まとまって出土したことから、縄紋時代中期後葉の最花A式の模式標本として提示することが可能であった（安達二

〇一三）。

本稿は、A地点につづき、東北地方北部における縄紋時代中期—後期土器型式編年の整備を目的として、中期最末から後期初頭と考えられるB地点から出土した土器標本を公表・分析するものである。さらに、標本の整理を進めていくなかで、A地点出土土器とB地点出土土器とは、同じ遺跡から出土しながらも、特徴に大きな差異が認められることが明らかになってきた。このため本稿では、最花貝塚遺跡B地点出土土器を提示したうえで、A地点とB地点との出土標本の比較を軸として、縄紋時代中期—後期の東北地方北部における土器型式の系統について論じたいと思う。

縄紋土器型式研究の方法は、古く一九三〇年代に生物系統学を応用して山内清男によって基礎づけられた。そ

れは、文様帯を基盤とする諸「形質」characterの「相同性」にもとづく人工物独自の「系統分類」といえる。縄紋土器型式研究において「系統」は、各地域における前代との対応関係の垂直方向の連続と、各時期における他地域との対応関係の水平方向の連続とが絡み合う、縦横連鎖構造で表わされる。これが「型式網」としての編年表である。山内は、土器個体の上位の形態レベルを文様帯においたが、そうした文様の構造的・階層的・系統的分析は、縄紋土器全体の系統関係の論理的決定を可能にする。縄紋土器全体を動的な構造的関連のもとにある一つの弁証法的な統合体としてとらえ、それを様々なレベルから操作的・認識論的に切断してみるることによって、諸型式が関連しあう体系を明示するのである。

一 東北地方北部における縄紋時代中期末—後期初頭の土器型式編年研究史

山内清男は、型式の年代的「系列」を、まず関東地方・東北地方北部・中南部で統合した(山内一九二八・一九二九・一九三〇)。そこで得られた階梯を全国的に敷衍して(山内一九三二・一九三六)、型式の並行関係を追及した。後統の研究者も、関東地方の型式序列を一

つの軸として、それと各地の型式とを対比させるかたちで編年を整備してきた。その結果、現在までに縄紋土器の編年体系は大部分できあがっているといっているが、その一方で、いまだに編年研究に遅れがみられる地域・時期もある。

そうしたなか大きな課題となっているのが、中期末から後期初頭の型式編年であり、多くの地域で編年をめぐる議論がつづいている。近年、関東地方における加曾利E式の研究が進み、後期の初頭とされる称名寺式最古段階に並行する「加曾利E5式」が設定され、編年に一定の見通しが立ってきたが、関東地方の型式序列との比較検討が難しい東北地方北部の該期の型式序列は、依然検討の余地が大きい(鈴木克一九七五・一九九四・一九九八、高橋一九八八、成田一九八四、柳澤二〇〇六)。例えば鈴木克彦氏により設定された「大曲I式」(鈴木克一九七五)あるいは「大曲1式」(鈴木克一九九四)は、当初、後期初頭(鈴木克一九七五)とされていたが、後に中期末(鈴木克一九九四・一九九八)と変更されるなど、時期、内容に変更が生じている(註一)。

一方、東北地方中南部における大木10式細分型式をめぐっては、現在、すべてを中期末とする意見が多く、隣

接する東北地方北部の編年もそれに則って検討される場合が多くなっている。しかし、本稿では、関東地方における型式編年の研究成果を重視し、大木10式（新）が、後期初頭の加曾利E5式、称名寺式（最古）に並行するという立場をとる。一方、大曲1式については、鈴木克彦氏が一九九四年に示したとおり（鈴木克一九九四）、大曲1遺跡から出土した、平縁、縦位回転縄紋地に一本描沈線で文様を描く土器を標準とする型式とする。大曲1式には、器体上半にJ字などの文様が連続し、中央には上半の文様と入り組む波状文が加えられており、大木10式（古）の文様モチーフが入り込んで成立した、大木10式（古）並行の型式ととらえられる。

一方で、最近、気候変化に関する自然科学的データの蓄積をうけ、気候変動と文化変化との関連に注目が集まっている。縄紋時代中期末―後期初頭は、寒冷化期と一致するとされ（安斎二〇一二）、それ故に、シンポジウムで遺物や遺跡等の様相が検討されるなど（安斎監修二〇一二・二〇一三、小林監修二〇一二）、当該期土器の集成・分析が全国的に進展しつつあるようである。東北地方北部においても、北海道南部、東北地方北部・中部の「後期」土器の集成本が刊行されるなど（鈴木克二

〇〇一・二〇一三）、編年研究に必要な材料が揃っている。しかし依然として、東北地方北部では、他の時期に比して当該期の資料は少なく、型式編年研究は十分に進んでいない。生業や居住など人間活動に関わる詳細な議論を進めるためにも、体系的な型式編年の構築が欠かせない。ここで公表する最花貝塚遺跡B地点出土土器は、そのために欠かせない資料であると考えている。

二 最花貝塚遺跡一九六四年調査におけるB地点

（一）最花貝塚遺跡の発掘調査史

最花貝塚遺跡は、八幡一郎氏、中島寿雄氏、中島全二氏によって一九四七年にはじめて発掘調査された（安達・安藤二〇〇九）。一九四八年にも八幡氏、江坂輝彌氏、中島全二氏によって、再び調査がおこなわれ、竖穴、石囲い炉、伸展葬人骨、頭蓋骨、貝、魚骨、獸骨、土器、石器、骨角器が出土したという（江坂一九五八）。一九五一年には、下北総合学術調査の一環として鈴木尚氏・酒詰伸男氏・埴原和郎氏らにより、「Aトレンチ」「Bトレンチ」の二地点が調査された。その後、少し間を置いた一九六四年に、江坂輝彌氏・金子浩昌氏・村越潔氏ら

によって、今回報告するB地点を含む、A～C地点の三つの地点の調査がおこなわれたわけである。

各調査の調査地点の関係を整理しておくと、一九四七年・一九四八年の調査は、同一地点でおこなわれており、一九五一年の「Bトレンチ」が、調査に参加した高校生による記録から一九四八年調査に隣接して設置されたことがわかる(佐々木一九五二)。また、江坂氏によれば一九六四年A地点も、一九四七年、四八年と同一であるという(江坂一九六九)。

一方、江坂氏によれば、一九五一年の「Aトレンチ」が、ここで報告する一九六四年のB地点だったようである。「Aトレンチ」は、「幅四メートル・長さ約八メートル・深さ二メートルに掘られ左端に拡張部がもうけられた」ものであるという(佐々木一九五二)。さらにA、B、C、D、E、Fの各部にわけられ、各部から次のような遺物が出土したという。A部からは、「中期の末から後期の初頭の堀之内式土器が細長い層となって多量に出土し」、「『アサリ』も多量に」、「『ハマグリ』も少量出土した」という。B部からは、「骨又骨工具・貝類が全体を通して一番多く遺物が出土し」、「土器(堀之内)」が本(筆者註…小の誤りか)量で大部分は貝であるとい

う。「貝類」は、「ニホンシジミ・カキ・サルボウ・ハマグリ」であり、「骨類」は「ニホンシカ(一番多量に出土した)・イノシシ・(ニホンシカとイノシシは歯も多く出土した)・イヌ・鳥・等」であるという。さらに「拡張部」からは「石器と同じ遺物が出土した」という。「炉跡」も検出されたという。C部からは、「『サルボウ』が大部分でAB部と同じく堀之内式土器が出土し」、「『ニホンシジミ』と『カキ』が少量出土した」という。「DEF部」からは、「少量の『ニホンシジミ』・『アサリ』・『ハマグリ』・等と堀之内式土器も出土及び鳥類の骨・骨角器・歯等が出土した」という(佐々木一九五一)。

最花貝塚遺跡は、その後、一九七七、一九七八、一九八一年及び一九八五年にむつ市教育委員会によっても調査されているが、調査地点は一九六四年A～C地点から離れた「D」地点及び「照徳神社背後」地点である。

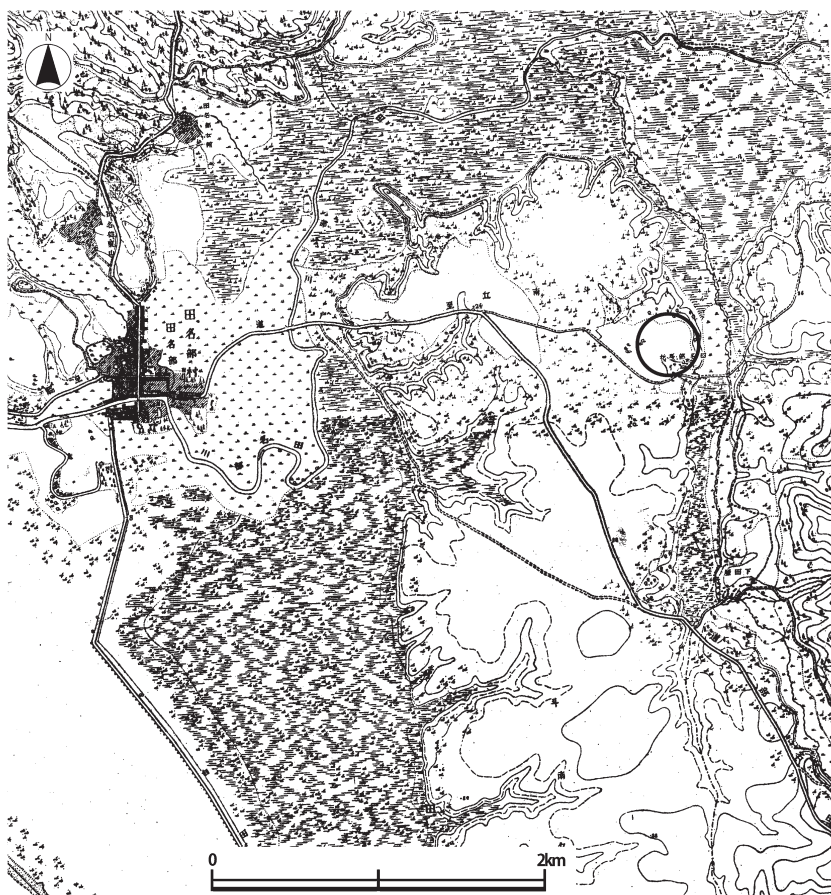
なお、一九五一年の調査出土土器は未報告であるため、本稿で提示する標本が、いまのところ唯一の最花貝塚遺跡B地点出土土器ということになる。

(二) 最花貝塚遺跡の地理・歴史的環境



第1図 最花貝塚遺跡の位置（国土地理院 2006「1:50,000 地形図 近川」・「1:50,000 地形図 むつ」より一部変更）

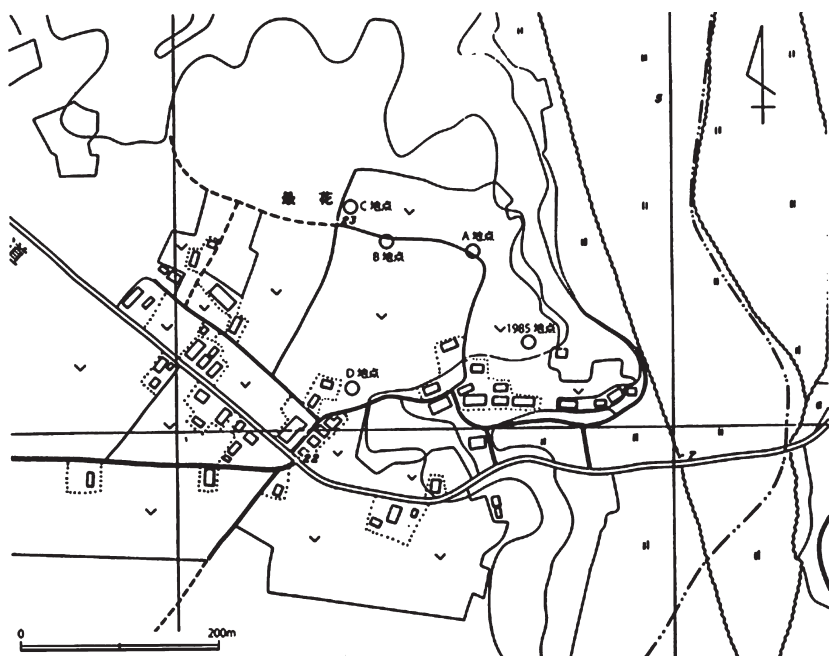
最花貝塚遺跡は、青森県むつ市大字田名部字最花に所在する（第1図）。下北半島北部、標高二五m前後の斗南ヶ丘と呼ばれる台地の北東部縁辺に位置する。台地東側は、田名部川の支流の青平川を挟んで下北丘陵と接している。最終間氷期（約一二万年前）の下末吉海進期に、下北丘陵の縁辺に形成された海成段丘のうちのひとつである。下北丘陵を主水源として大湊湾へ注入する田名部川が、この台地と北部の段丘とを切り離している（安藤二〇〇九）。明治



第2図 最花貝塚遺跡の位置 (大日本帝國陸地測量部 1895「1:20,000 地形図 田名部」・「1:20,000 地形図 大湊」・「1:20,000 地形図 田屋」より一部変更)

二八(一八九五)年発行の地図をみても、青平川と田名部川とに囲まれた標高二五m前後の斗南ヶ丘東北端上に「田名部最花」の文字を認めることができ、以後付近の大きな地形の改変はなされていないことがわかる(第2図)。

一方、斗南ヶ丘の西側の田名部低地は砂州地形の「谷底平野型(浜提列平野タイプ)」の代表例として知られている(松原二〇〇六、一五八頁)。海岸部には、現在までに幅一、二kmの浜堤が、内から順に三列形成されてい



第3図 最花貝塚遺跡（橘編 1986 より一部変更）

る。最初の浜提は、約四五〇〇年前に形成されたと推測され（松本一九八四）、縄紋時代中—後期の海面の停滞期ないしは低下期に対応する。現在の河口より七kmほど遡った、最花貝塚遺跡に近い、田名部川の青平川との合流点付近も、標高三m程度に過ぎず、前期の海面上昇期にはその付近まで海が入り込んでいたと考えられる（安藤二〇〇九）。後背地の環境は、砂州の発達により内湾から潟湖に変化し（松本一九八四）、浜提形成とともに汽水域化が進んだとされている（松島・奈良一九八八）。

最花貝塚遺跡は、少なくともA～Dの四つの地点に貝層が分布し（第3図）、広い範囲に竪穴住居址などの遺構が展開する、縄紋時代中期を中心とした径約二〇〇mの範囲に及ぶ集落遺跡と評価することができる。遺跡の北半部、A～C地点一带に前期後葉の円筒下層c・d式が比較的多くみられ、中期前葉の円筒上層a式は、D地点まで分布が広がる。とくにC地点に円筒上層・下層式のまとまった出土が認められる。円筒上層b式から榎林式は、分布が限られるよ

うになるが、中期後葉の「最花式」はA地点、中期最末の「大曲1式」は今回報告するB地点にまとまった出土が認められ、後期初頭の土器は、再び分布が限られるようになる。A・B・C各地点の土層の構成や、遺物包含層、貝層の時期に大きな違いがあることから、現在と異なり包含層形成時の地形が複雑でなければ、各地点のトレンチが、住居址等の遺構内に入っている可能性も想定されている。なお、二〇〇九年の報告書にて江坂氏による「A〜D」などの「地点貝塚」としての呼称は、一つの貝塚遺跡内の各地点名として改称されている(安藤二〇〇九)。

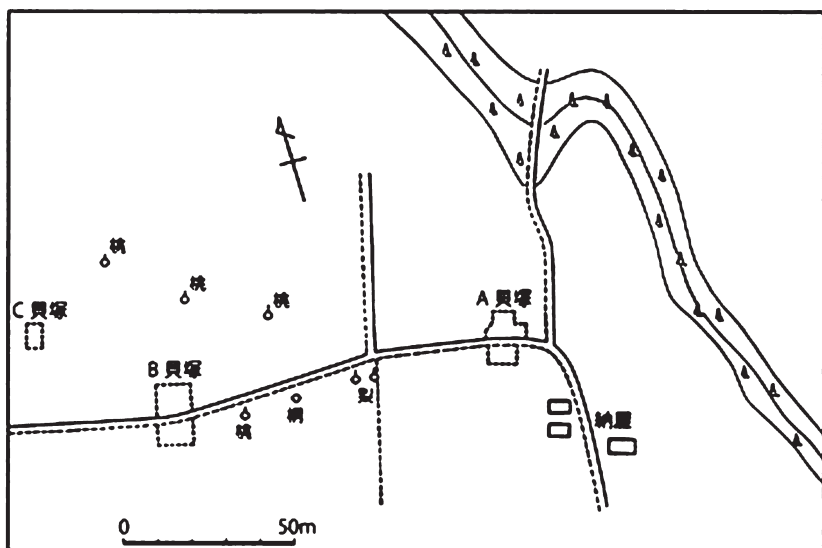
(三) 一九六四年の発掘調査の概要

一九六四年調査出土資料・記録は、慶應義塾大学民族学考古学研究室に保管されている。現在までに確認された、一九六四年の発掘調査に関する記録類は、セクショングラフA地点三枚、B地点・C地点各一枚、日誌一セット、調査時の三五mmモノクロフィルム二本、カラーフィルム一本である。調査は、一九六四年十月七日〜一日の五日間おこなわれた。A〜C地点の三ヶ所にトレンチを設定し、A地点約六m、B地点約一五m、C地点約二mの

計約二三mが調査されている(第4図)。日誌には調査の参加者として、江坂輝彌氏のほか、五十音順に阿井眞咲、井上久、金子浩昌、笹津備洋、相馬努、瀧沢幸長、橘善光、龍原武嗣、村越潔、村田明男、吉田義昭の各氏の名前が記録されていた。

日誌よれば、その後の「最花式」研究史にかかわる村越・橘両氏のうち、村越氏はA地点、橘氏はB地点の発掘作業を担当している。この調査地点の違いが、後年の各氏の「最花式」のイメージの相違に影響することになる。村越氏は、A地点の土器を見ていたため、後に「最花式」の的を射た記述をすることができたのであろう(村越一九七四)。一方で、B地点を担当した橘氏は、結果的にB地点に多く認められる中期最末の土器を、後に、氏の「最花式」に含めてしまったのである(金子・牛沢・橘・奈良一九七八、橘・奈良一九八〇、金子・橘・奈良一九八三、橘編一九八六、橘一九九四)。

日誌から判明するB地点の調査の概要は以下のとおりである。長さ三m、幅二mの調査区を南北に縦に二ヶ所設置し(B-1-1区、B-1-2区)、さらに両調査区の西側にそれぞれ拡張区を設定(B-2-1区、B-2-2区)、掘削している。表土(黒色土層)の下に一



第4図 A～C貝塚（地点）の位置（金子1967より一部変更）

5cm程度の深さで黄褐色土層が検出され、その下にシジミを主体として、アサリ、ハマグリなどからなる貝層が存在し、その下方地表下六〇cmの深さに焼土層が一部認められたようである。貝層の下には黒褐色土層があり、地表下一m強の深さでローム層に達する。日誌には、黒褐色土層及びその下からは、土器片の検出量が減ったとの記載がある。

（四）標本の保管状況と整理作業の方法

一九六四年発掘の最花貝塚遺跡出土資料は、慶應義塾三田キャンパス西校舎四階の民族学考古学資料室に保管されていた。土偶と一部の石製品を除く、ほぼすべてが木製箱に収められており、総数は六一箱であった。二〇〇三年度に整理作業を開始した。遺物の大半は土がついた状態であり、すべての資料を水洗した。

遺物は、土器が圧倒的多数を占め、他に石器、骨角器、土製品、動物骨、貝が含まれていた。遺物に対する注記は一切なされていなかったが、幸い大半の箱には、発掘調査当時のものと思われる、地点、グリッド、層位、日付等の記載されたラベルが入っていた。このラベルをもとに整理をおこなったところ、A地点出土資料は二五箱、

B地点は一八箱、C地点は六箱、地点不明は一二箱であった。なお、地点不明の箱には、地点の異なるラベルが二枚混入しているもの、ラベルの含まれない箱、ラベルの地点表記が不明確なものの三通りがあった。

すべての地点の資料を、箱ごとにプラスチックコンテナに移し替え、一点一点注記をおこなった。この作業と並行して土器の観察を進めたところ、地点ごとに主体となる土器の時期が異なることが判明してきた。A地点は所謂「最花式」土器、B地点は大木10式並行期〜後期初頭と思われる土器群、C地点は円筒下層式(d1、d2)土器、円筒上層式(a)土器が中心であった。

三 B地点出土土器の記載と分析・同定

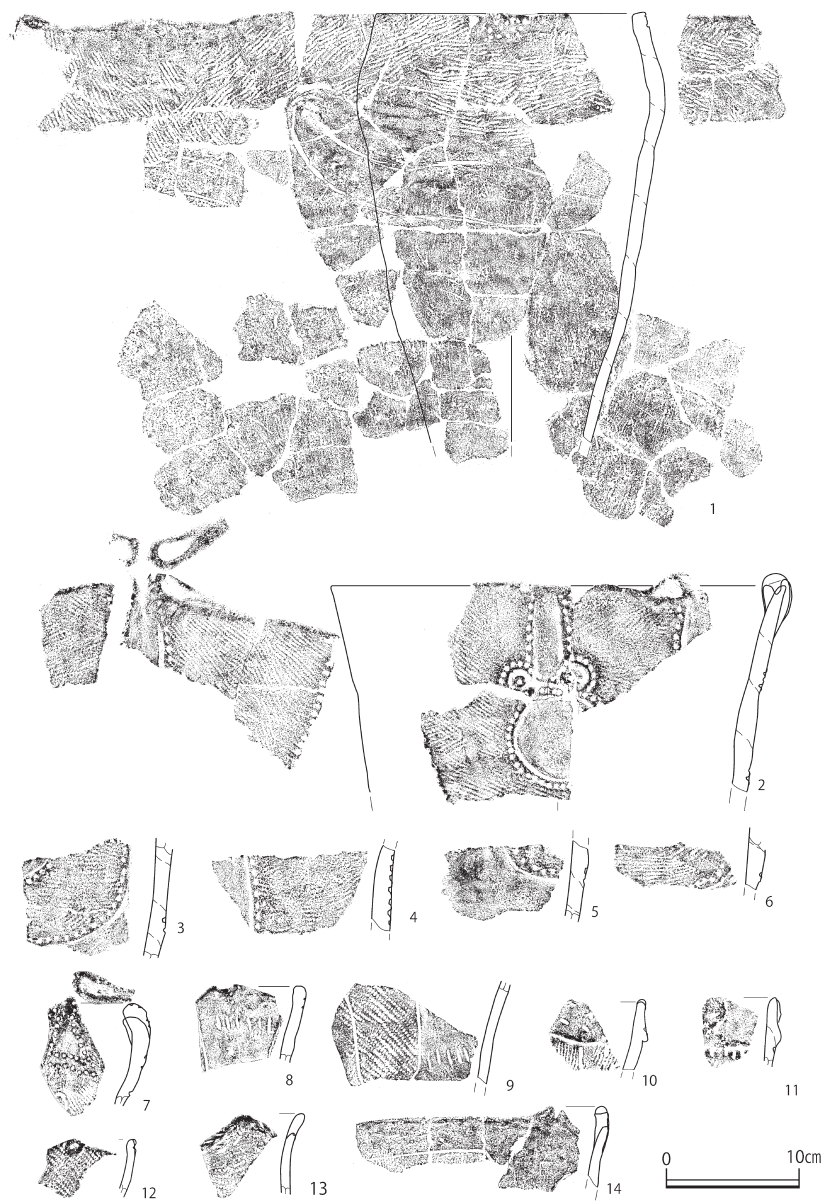
B地点出土土器は、円筒上層式土器、わずかな最花式土器、及び中期末から後期初頭の土器で構成されていた。本稿では、このうち円筒上層式土器を除いたうえで、口縁部破片を中心に報告する(第5〜9図、表1)。口径の判明する口縁部破片すべての他、文様のバラエティが把握できるように選定した口縁部を中心とする破片を掲載した。

1〜29は文様をもつ深鉢形土器の口縁部破片である。

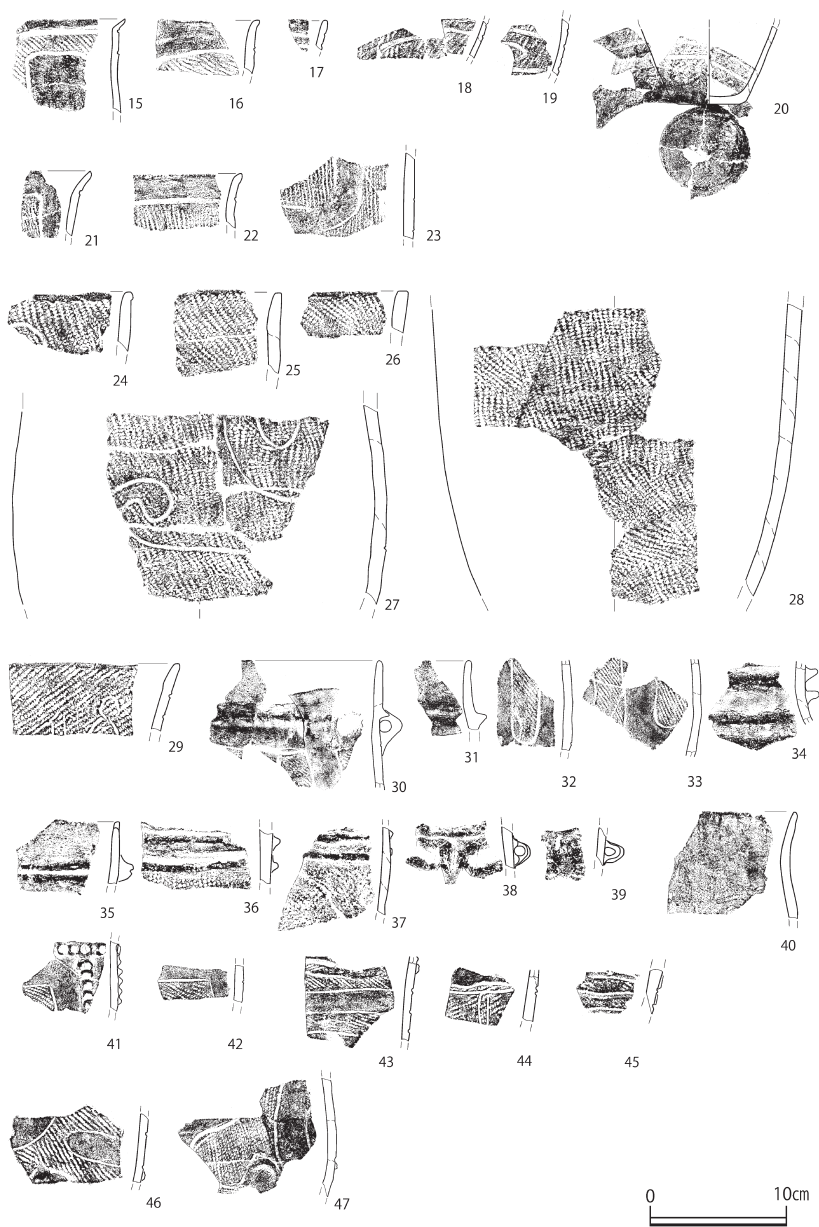
1〜14は口縁部に突起をもつ土器である。

1には、明確なI文様帯は認められないものの、突起部とそこに加えられた刺突とが認められる。胴部に沈線文と貼付文の加えられたII文様帯が認められる。二単位の、わずかに隆起する突起部には円形刺突文が複数加えられている。胴部には右下に流れる逆U字状の沈線文が加えられており、その上端部に沿って扁平な貼付文が加えられている。縄紋は器体の上半部にのみ加えられており、逆U字状の沈線文の内部には施されていない。現状では下北半島における未命名の型式といわざるを得ないが、磨り消し縄紋(充填縄紋)の手法が採用されていることを重視すれば、最花A式より後の型式であることは間違いない。大木10(新)式に認められる特徴的な貼付文がみられることから、大木10(新)式並行と評価できる。貼付文によって、縄紋部と無紋部との境が強調されている。11の口縁突起部にも、類似のノ字状の扁平な貼付文が加えられている。

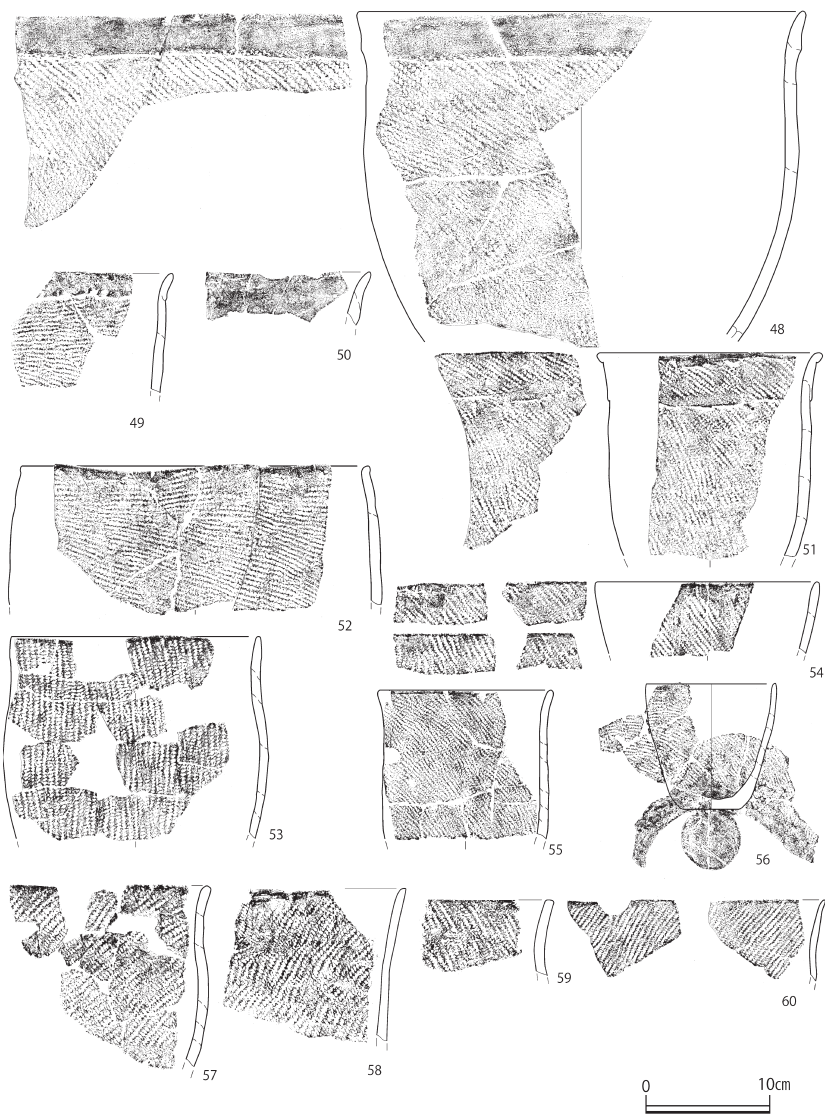
2〜6、7、8、14は双頭状の突起が特徴的な土器である。双頭状の突起は、立体的で口唇部にくぼみをもつものと(2〜6、7)、平坦なもの(8、14)とに分けられる。2〜6、7については、口縁部の凹状文をもつ



第5図 最花貝塚遺跡B地点出土土器 1



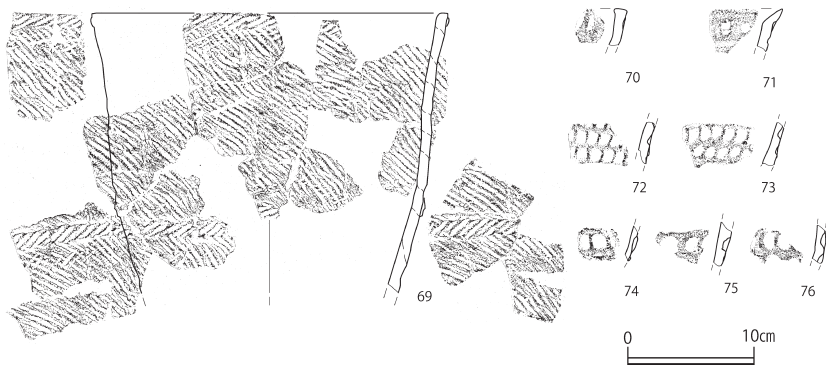
第6図 最花貝塚遺跡B地点出土土器 2



第7図 最花貝塚遺跡B地点出土土器 3



第 8 図 最花貝塚遺跡 B 地点出土土器 4



第9図 最花貝塚遺跡B地点出土土器 5

て痕跡的なⅠ文様帯とすること
ができるだろう。
Ⅰ文様帯の直下、
胴部に沈線文様
の加えられたⅡ
文様帯が認めら
れる。2、6は
同一個体であり、
磨り消し縄紋手
法による文様が
加えられている。
縄紋部と無紋部
とを区画する沈
線に沿って、縄
紋部側に円形刺
突文列が加えら
れており、縄紋
のない部分が強
調されている。
7の口縁の突起

部には円形刺突文列により三角状の文様が描かれている。
8、14には、明確なⅠ文様帯は認められないものの突起
部の装飾（双頭状突起あるいはそこに加えられた刺突）
が認められる。胴部には、沈線文様の加えられたⅡ文様
帯が認められる。8の口縁突起直下には小円形刺突文が
縦位方向に三か所加えられている。以上、痕跡的なⅠ文
様帯とその直下のⅡ文様帯との存在、及び文様モチーフ
に大木10（新）式との関係が想定されることから、2、
6、7、8、14も下北半島における大木10（新）式並行
の未命名型式と考えておく。

15、16、17、20、21、22・23には、文様の全体を把握
することはできないものの、Ⅰ文様帯、及びその直下の
Ⅱ文様帯が認められる。いずれも口縁部が外反しており、
とくに15は口縁部直下の横位沈線文部分でやや強く屈曲
している。いずれも14と同様の文様が加えられていたと
考えられ、やはり、下北半島における大木10（新）式並
行の未命名型式といえるであろう。

10、11には、口縁の段部に沈線文や貼り付け文が加え
られており、Ⅰ文様帯が認められる。その直下に沈線文
様の加えられたⅡ文様帯が認められる。段部に刺突文列
（10）や曲線を描く扁平な貼付文（11）が加えられてい

表1 最花貝塚遺跡B地点出土土器観察表

図 No	出土地点 地区	層位	器種・ 部位	口径 〔底径〕	器高 (残存高)	外面	内面	胎土	外面色調	内面色調	備考
1	B-2-1		深鉢形・ 口縁	20.0	(32)	L横・縦・沈線、貼 り付け	口縁横位ナデ、胴 横位ナデ・ミガキ	骨針状物質含む (～ 1mm)、粗砂含む、細 砂多含	にぶい、橙 (75YR7/4)、 黒褐 (75YR3/1)	にぶい、黄橙 (10YR6/3)、 褐灰 (10YR4/1)	突起2単位
1	B-2-2/ B-2-1/ B-2-2/C	-30～-55 cm /-/-30 cm /第2貝層	深鉢形・ 口縁	34.0	(15.3)	口縁LR横・下部斜 ～縦・沈線、刺突 磨り消し	横位ナデ	粗砂多含、細砂多含	灰白 (75YR8/3)	浅黄橙 (75YR6/3)	器面やや粗い、3～ 6と同一個体
1	B-2-2	-30～-55 cm 胴	深鉢形・ 胴			LR斜～縦・沈線、 刺突、磨り消し	横位ナデ	粗砂多含、細砂多含	灰白 (75YR8/3)	浅黄橙 (75YR8/3)	器面やや粗い、2・ 3・5・6と同一個 体
1	B-2-2	-30～-55 cm 胴	深鉢形・ 胴			LR斜～縦・沈線、 刺突、磨り消し	横位ナデ	粗砂多含、細砂多含	灰白 (75YR8/3)	浅黄橙 (75YR8/3)	器面やや粗い、2～ 4・6と同一個体
1	B-2-2	-30～-55 cm 胴	深鉢形・ 胴			LR斜～縦・沈線、 刺突、磨り消し	横位ナデ	粗砂多含、細砂多含	灰白 (75YR8/3)	浅黄橙 (75YR8/3)	器面やや粗い、2～ 5と同一個体
1	B-1-1	-20～-30 cm 口縁	深鉢形・ 口縁			RL横・沈線、刺突	口縁に沿ったナデ 下部縦位ナデ	骨針状物質含む (～ 1mm)、粗砂含む、細 砂多含	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	
1	8		深鉢形・ 口縁			沈線、縦位ナデ・ ミガキ→刺突、短 沈線	口縁横位ナデ・ミ ガキ	粗砂含む、細砂多含	橙 (75YR7/6)	にぶい、橙 (75YR7/4)	9と同一個体
1	9		深鉢形・ 胴			沈線→LR縦→磨り 消し→縦位ナデ・ ミガキ→短沈線	横位、縦位ナデ・ ミガキ	粗砂含む、細砂多含	橙 (75YR7/6)、 灰 (N5/)	橙 (75YR7/6)、 灰 (N6/)	8と同一個体
1	B-1-1	表土	深鉢形・ 口縁			口縁短沈線、胴下 書き沈線(1mm)→ 熱糸L縦→刺突→ 沈線(3mm)	斜位ナデ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm)含む、細砂多含	褐灰 (10YR4/1)	にぶい、黄橙 (10YR6/4)	
1	B-1-1	-20～-30 cm 口縁	深鉢形・ 口縁			横位ナデ・ミガキ 貼り付け、短沈線	斜位ナデ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm)含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、橙 (75YR7/4)	にぶい、褐 (75YR5/3)	

1	12	B-1-2	表土	深鉢形・ 口縁			LR 縦→円形貼り付 け→刺突	斜位ナデ・ミガキ	骨 針 状 物 質 (～1 mm) 含む、細砂多含	にぶい、黄澄 (10YR7/4)、 褐灰 (10YR4/1)	にぶい、黄澄 (10YR7/3)	
1	13	B-1-2北 東隅		深鉢形・ 口縁			LR 斜、口唇短沈線	横位ナデ・ミガキ	骨 針 状 物 質 (～2 mm) 含む、細砂多含	にぶい、黄澄 (10YR7/3)、 褐灰 (10YR5/1)	にぶい、黄澄 (10YR7/3)、 褐灰 (10YR5/1)	短沈線 (左3、右 2)
1	14	B-1-1	-20～30 cm	深鉢形・ 口縁			沈線、熱糸L? 縦 磨り消し、口縁横 位ナデ	横位ナデ	骨 針 状 物 質 含む (1.5 mm)、粗砂多含、 細砂多含	浅黄澄 (10YR8/4)	にぶい、黄澄 (10YR7/3)	
2	15	B-1-1	表土	深鉢形・ 口縁			LR 縦→沈線→磨り 消し	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨 針 状 物 質 (～1 mm) 多含、細砂多含	橙 (5YR7/6)	にぶい、黄澄 (10YR7/3)	
2	16	B-1-2北 東隅		深鉢形・ 口縁			RL 横→沈線、口縁 横位ナデ・ミガキ	横位ナデ・ミガキ	細砂多含	黒褐 (10YR3/1)	褐灰 (10YR4/1)	焼成良好
2	17	B-1-2	-40～55 cm	深鉢形・ 底	(60)	(60)	RL 横→沈線→磨り 消し	胴縦位ナデ・ミガ キ良好、胴部下端 横位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)	18～20 と同一個体
2	18	B-1-1	-20～30 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横→沈線→磨り 消し	横位ナデ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)	17・19・20 と同一 個体
2	19	B-1-2	-40～55 cm	深鉢形・ 胴			RL 横→沈線→磨り 消し	横位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)	17・18・20 と同一 個体
2	20	B-1-2	-40～55 cm	深鉢形・ 胴			RL 横→沈線→磨り 消し	縦位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR4/1)	17～19 と同一個体
2	21	B-2-1		深鉢形・ 口縁			沈線、熱糸L 縦磨 り消し、口縁横位 ナデ、下部縦位ナ デ	横位ナデ	粗砂含む、細砂多含	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	
2	22	B-2-1		深鉢形・ 口縁			沈線、熱糸L 縦磨 り消し、横位ナデ	横位ナデ	粗砂含む、細砂多含	灰白 (10YR8/2)、 灰 (N5/)	浅黄澄 (10YR8/3)	23 と同一個体
2	23	C	第2貝層	深鉢形・ 胴			沈線、熱糸L 縦位 磨り消し、文様に 沿ったナデ	縦位ナデ	粗砂含む、細砂多含	浅黄澄 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	22 と同一個体

24	B-2-2/ B-2-1	-30～55 cm / -30 cm / ー	深鉢形・ 胴		(14.7)	RL 横→沈線	縦位ナデ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	浅黄燈 (7.5YR8/6)	にぶい・燈 (7.5YR/4) 灰 (N4)	25・28 と同一個体
25	B-2-2	-30 cm / 表 土～30 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横	縦位ナデ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	燈 (7.5YR7/6)	浅黄燈 (7.5YR8/4)	24・26～28 と同一 個体
26	B-2-1		深鉢形・ 口縁			RL 横	縦位ナデ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	浅黄燈 (7.5YR8/4)	浅黄燈 (7.5YR8/4)	24・25・27・28 と 同一個体
27	B-2-2	-30～55 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横→沈線	縦位ナデ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	燈 (7.5YR7/6)	浅黄燈 (7.5YR8/6) 灰 (N4)	24～26・28 と同一 個体
28	B-2-2	-30 cm / 表 土～30 cm /-30～50 cm	深鉢形・ 胴		(12.0)	RL 横	縦位ナデ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	浅黄燈 (7.5YR8/6)	浅黄燈 (7.5YR8/3)	24～27 と同一個体
29	B-2-1		深鉢形・ 口縁	18.0	(5.1)	LR 横→沈線	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、細砂多含	浅黄燈 (10YR8/4)	黄燈 (10YR8/6)	
30	B-1-2北 /B-2-2	ー / -30～ -55 cm	深鉢形・ 口縁			沈線、RL 横磨り消 し口縁横位ナデ、 把手縦位ナデ	縦位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	燈 (7.5YR7/6)	燈 (7.5YR7/6)	31～33 と同一個体
31	B-2-2	-30 cm	深鉢形・ 口縁			横位ナデ	縦位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	燈 (7.5YR7/6)	燈 (7.5YR7/6)	30・32・33 と同一 個体
32	B-1-2北		深鉢形・ 胴			横位ナデ、沈線、 RL 横磨り消し	縦位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	にぶい・黄燈 (10YR7/3)	にぶい・黄燈 (10YR7/4)	30・31・33 と同一 個体
33	B-1-2北		深鉢形・ 胴			横位ナデ、沈線、 RL 横磨り消し	縦位ナデ・ミガキ 良好	粗砂含む、細砂多含	にぶい・黄燈 (10YR7/3)	にぶい・黄燈 (10YR7/4)	30～32 と同一個体
34	B-2-2	-30～55 cm	深鉢形・ 胴			横位ナデ	縦位ナデ	礫含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい・黄燈 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	
35	B-1-1	表土	深鉢形・ 口縁			貼り付け、横位ナ デ・ミガキ	口縁横位ナデ・ミ ガキ (一部縦位ナ デ・ミガキ)	細砂多含	浅黄燈 (10YR8/4)	燈 (7.5YR7/6)	
36	B-2-2	-30～55 cm	深鉢形・ 胴			貼り付け→熱糸L 縫 (/RL 斜?)、横 位ナデ・ミガキ	横位ナデ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、細砂多含	燈 (7.5YR7/6)	にぶい・黄燈 (10YR7/4)	

2 37	B-1-1	表土	深鉢形・ 胴			不明	不明	細砂多含	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)、 褐灰 (10YR5/1)	焼成不良
2 38	B-1-2北		深鉢形・ 胴			横位ナデ・ミガキ 把手中心縦位ナ デ・ミガキ	縦位ナデ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	焼成不良
2 39	B-2-2	-30～-55 cm	深鉢形・ 胴			横位ナデ・ミガキ 把手中心縦位ナ デ・ミガキ	横(?)位ナデ・ ミガキ	粗砂含む、細砂多含	にぶい黄橙 (10YR7/4)	褐灰 (10YR5/1)	焼成不良
2 40	B-1-1	-30 cm	深鉢形・ 口縁			横位ナデ・ミガキ 下半縄紋?	縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質(～1 mm)含む、粗砂含む、 細砂多含	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
2 41	B-1-2	-20～-40 cm	深鉢形・ 胴			沈線→LR縦→磨り 消し、斜位、縦位 ナデ・ミガキ	縦位ナデ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰褐 (7.5YR6/2)	42と同一個体
2 42	B-1-1北		深鉢形・ 胴			沈線→LR縦→磨り 消し、斜位、縦位 ナデ・ミガキ	縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質含む(～ 1mm)、粗砂含む、細 砂多含	にぶい橙 (7.5YR7/5)	橙 (7.5YR7/6)	41と同一個体
2 43	B-1-2北		深鉢形・ 胴			貼り付け・沈線 →LR縦→貼り付け 上LR横	横位ナデ・ミガキ	骨針状物質(～2 mm)含む、細砂多含	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐灰 (10YR5/1)	沈線右上がり
2 44		第1貝層	深鉢形・ 胴			RL縦?→段→沈線	縦位ナデ・ミガキ 良好	骨針状物質(～1 mm)含む、細砂多含	橙 (7.5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	
2 45			深鉢形・ 胴			貼り付け→RL横? 沈線	不明	粗砂含む、細砂多含	橙 (7.5YR6/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	上から1、3本目沈 線は貼り付け後、 2・4(?)本目は前、 焼成不良
2 46	B-1-2北		深鉢形・ 胴			沈線→LR縦→磨り 消し	縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質(～1 mm)含む、細砂多含	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR4/1)	
2 47	B-2-2/ B-2-2	-30 cm / -30 ～-55 cm	深鉢形・ 胴			RL斜→沈線→磨り けし	縦位、斜位ナデ	粗砂含む、細砂多含	橙 (5YR6/6)、 暗灰 (N3)	黒 (N2)、 にぶい黄橙 (10YR7/4)	
3 48			深鉢形・ 口縁	36.0	(26.4)	口縁段→RL横	口縁横位ナデ、下 部縦位ミガキ下部 縦?位ナデ・ミガ キ	粗砂多含、細砂多含	褐 (7.5YR4/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	

3 49	B-1-1	-30～-70 cm	深鉢形・ 口縁			RL 斜一段	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ、一部 斜位ナデ	骨 針 状 物 質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、褐 (7.5YR6/3)	橙 (7.5YR6/6)	口縁部横位ミガキ
3 50	B-1-1	-30～-70 cm	深鉢形・ 口縁			横位ナデ・ミガキ	横位ナデ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	にぶい、黄橙 (10YR7/3)	橙 (7.5YR6/6)	
3 51	B-1-2 北 東隅		深鉢形・ 口縁	180	(16.2)	RL 横一段→RL 横	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	褐灰 (7.5YR4/1)	灰褐 (7.5YR6/2)	
3 52	B-1-2 北 東隅		深鉢形・ 口縁	280	(11.1)	RL 斜→横	縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質多含 (～ 2mm)、粗砂含む、細 砂多含	にぶい、黄褐 (10YR5/3)	橙 (7.5YR7/8)	
3 53	B-1-1	-30～-70 cm	深鉢形・ 口縁	200	(16.1)	RL 斜	口縁縦位、横位ナ デ・ミガキ、下部 縦位ナデ・ミガキ	骨針状物質含む (～ 1mm)、粗砂含む、細 砂多含	にぶい、黄褐 (10YR5/4)	にぶい、黄橙 (10YR7/3)	
3 54	B-1-1/ A-2-1/ A-2-1	-30 cm / 目 層下 / 最下	深鉢形・ 口縁	180 ?	(5.6)	RL 斜	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ良好、ミ ガキ良好	骨針状物質含む (～ 1mm)、粗砂含む、細 砂多含	にぶい、黄褐 (10YR7/3)、 黒褐 (10YR3/2)	にぶい、黄橙 (10YR7/4)、 褐灰 (10YR5/1)	
3 55	B-1-2 北		深鉢形・ 口縁	140	(11.8)	LR 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	にぶい、橙 (5YR6/3)	褐灰 (5YR4/1)	
3 56	B-2-2	-30～-55 cm	深鉢形・ 口縁～底	102 (4.6)		200	L 縦	横位ナデ・ミガキ	粗砂多含、 細砂多含	橙 (7.5YR7/6) にぶい、橙 (7.5YR7/3)	
3 57			深鉢形・ 口縁			LR 横	縦位ナデ・ミガキ	粗砂含む、細砂多含	橙 (5YR6/6)、 黒褐 (5YR3/1)	黄橙 (10YR7/3)	
3 58	B-2-2	-30 cm	深鉢形・ 口縁			LR 横	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨 針 状 物 質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR6/2)	
3 59	B-2-2	表 土～-30 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨 針 状 物 質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	浅黄橙 (10YR6/4)	にぶい、黄橙 (10YR6/4)	

3	60	B-1-1	-20～-30 cm /表土	深鉢形・ 口縁	220	(6.4)	RL 縦	横位ナデ・ミガキ	粗砂多含、細砂多含	灰青褐 (10YR6/2)	にぶい、黄褐 (10YR7/4)	
4	61	B-1-1 東 壁	-20～-30 cm	深鉢形・ 口縁～底	260 [9.6]	44.8	LR 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ、胴部 下端横位ナデ	骨針状物質含む、細 砂多含	にぶい、黄褐 (10YR6/4)、 一部黒褐 (10YR3/1)	橙 (5YR6/6)、 灰 (N5/)	
4	62	B-2-2	-30～-55 cm	深鉢形・ 口縁	240	(12.8)	燃糸 L 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	
4	63	B-2-2	-30～-55 cm	深鉢形・ 口縁	280 ?	(7.3)	燃糸 R 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR7/3)	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	
4	64	B-1-1	-20～-30 cm	深鉢形・ 口縁	220 ?	(6.6)	燃糸 R 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ、下部縦位ナ デ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	黒褐色 (7.5YR3/1)	
4	65	B-1-2	表土	深鉢形・ 口縁			口縁燃糸 R 横、下 部燃糸 R 縦	口縁横位ナデ・ミ ガキ良好、下部縦 位ナデ・ミガキ良 好	骨針状物質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	にぶい、橙 (7.5YR6/4)、 灰 (N4/)	にぶい、橙 (7.5YR6/4)	
4	66	B-1-1	-30 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横→段・沈線・ 刺突	横位ナデ・ミガキ	骨針状物質 (～1 mm) 含む、粗砂含む、 細砂多含	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	口縁部横位ミガキ
4	67	B-1-2 北 東隅		深鉢形・ 口縁			RL 横→段・沈線	横位ナデ・ミガキ	粗砂多含	黒褐 (10YR3/1)	褐灰 (10YR4/1)	口縁部横位ミガキ、 焼成良好
4	68	B-1-1	-30 cm	深鉢形・ 口縁			RL 横→段→沈線	口縁横位ナデ・ミ ガキ良好、下部縦 位ナデ・ミガキ良 好	粗砂多含	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい、赤褐 (5YR5/3)	口縁部横位ミガキ、 焼成良好
4	69	B-2-2/A 東南隅/ B-1/ B-1-2 北 東隅/ B-1-2 北 —	-30～-55 cm / 暗褐色包 含最下/-30 cm / — / —	深鉢形・ 口縁	280	(21.9)	口縁 LR (III) 横、 胴部 LR (III) 縦→ 隆部貼り付け→隆 部 LR (III)	口縁横位ナデ、下 部縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい、褐 (7.5YR6/3)	
4	70	B-1-2	表土	深鉢形・ 口縁			右手 (親指? 右上 向き) 爪背左上向 き	縦位ナデ	骨針状物質含む、細 砂多含	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	

4	71	B-1-2	-20~40 cm	深鉢形・口縁			人指指? 上向き、爪背器面側、下から上に押し込み	横位ナナ	粗砂多含、細砂多含	にぶい・燭 (7.5YR6/3)	浅黄燭 (7.5YR8/3)	爪痕良好
4	72	B-1-2北		深鉢形・胴			右手指下向き、爪背左上から右上へ押し込み	縦位ナナ	粗砂多含、細砂多含	浅黄燭 (7.5YR8/6)	燭 (7.5YR7/6)	爪痕良好、73と同一体
4	73	B-1-2	表土	深鉢形・胴下端			右手指下向き、爪背左上から右上へ押し込み	縦位ナナ、下方横位ナナ	粗砂多含、細砂多含	浅黄燭 (7.5YR8/6)	燭 (7.5YR7/6)	爪痕良好、72と同一体
4	74	B-1-2	-40~50 cm	深鉢形・胴			人差し指上向き、指腹押圧→両側を親指・人差し指上向きでつまみ?	縦位ミガキ	粗砂多含、細砂多含	灰燭 (7.5YR4/2)	燭灰 (7.5YR4/1)	
4	75	B-1-2	表土	深鉢形・胴			右手指上向き、爪背左上から押圧	縦位ナナ	粗砂多含、細砂多含	明燭灰 (7.5YR7/1)	にぶい・燭 (7.5YR7/4)	爪痕良好
4	76	B-1-2北		深鉢形・胴			指右から左?	左下がりナナ	粗砂多含、細砂多含	浅黄燭 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2)	爪痕あり

注) 粘土:「僅かに含む」(1%未満)「含む」(1%以上5%未満)「多含」(5%以上) ; 「隙」(>2 mm)「粗砂」(2 mm~0.2 mm)「細砂」(0.2 mm~0.02 mm)

る。これらは、東北地方北部における大木10(新)式に比定できる。

12の突起部には円形貼付文、13の口唇部には短沈線文が加えられている。胴部は縄紋のみで、Ⅱ文様帯は存在しない。明確ではないもののⅠ文様帯が認められることから、これらも下北半島における大木10(新)式並行の未命名型式を構成する土器であると考えられる。

24~28、29はⅡ文様帯のみで構成される土器である。

24~28は、同一個体であり、大木10式(古)の文様モ

チーフが認められる一方で、磨り消し縄紋手法は採用されていない。大曲1式である。大曲1式は、最花A式に後続する型式の一つであるが、文様帯の構造、文様の構造、文様要素はいずれも最花A式の系統ではない。29の胴部には、一条描きで円形文とその直下の逆U字状文とからなる沈線文様と二条の縦位沈線文様とが間隔をあけて並列して加えられている。この文様は最花A式の文様モチーフから継続したものと評価することができ、大木10式(古)及び大曲1式に並行する、最花A式につづく

未命名型式と考えておく。

30～39は無紋口縁部と胴部との間に一つあるいは二重の段をもつ深鉢形土器の口縁部破片である。縦位の橋状把手は段部に連結している(30、38)。文様が加えられる場合は、段部より下に加えられている。大木10式(新)の文様モチーフ、磨り消し縄紋手法の影響がみられる文様をもつことから、大木10式(新)に並行する未命名型式を構成する器種の一つと考えたい。

40は、胴中央部が屈曲し最大径となる器形の、深鉢形土器の口縁部破片である。最花A式Ⅱ類土器である。

41～47は文様をもつ深鉢形土器の胴部破片。いずれも文様の全体は不明であるが、磨り消し縄紋手法が採用されている。41・42、43、44、45には、隆帯による文様が認められる。隆帯上には、縄紋や、指による刺突が加えられている。46、47は、先述の、磨り消し縄紋手法に伴う沈線文様の屈曲部に扁平な貼付文が加えられた土器である。文様モチーフ及び磨り消し縄紋手法は大木10式(新)の影響と考えられることから、大木10式(新)並行の未命名の型式ということになる。

48～51は口縁部に緩い段をもつ深鉢形土器。胴部に縄紋が加えられているが文様は認められない。51はRLの

縄紋原体を横位に回転した後に、段を加え、さらに段部にRL縄紋原体を横位に回転している。縄紋原体の横位回転や、縄紋と段との加飾順から、最花A式ⅠB類に比定できる可能性がある。49は斜位回転である点を除けば、縄紋と段との加飾順から、同様に最花A式ⅠB類に比定できる可能性がある。48は、口縁部に段を作出後に、縄紋を加えていることや、段部を形成する粘土紐の下端が比較的よく撫でられていることから、最花A式ではなく、最花A式につづく、大木10式(古)並行の未命名型式を構成するものの一つと考えられる。

52～65は縄紋のみで文様をもたない深鉢形土器。撫糸文をもつ土器(62～65)は、原体を縦位(65のみ胴部縦位・口縁部横位回転)に回転していることが特徴であり、最花A式ではなく、大木10式(新)あるいは(古)並行の未命名型式を構成するものの一つであろう。その他、縄紋をもつ土器は、最花A式の特徴的である原体の横位回転ではなく、縦位(55、56、60、61)や斜位(52、53、54)が認められる他、器形も、最花A式より口縁部径に対する器高が大きくなっている(61)。これも大木10式(新)あるいは(古)並行の未命名型式を構成するものの一つであろう。

66、68は、口縁部に段、胴部に縄紋、沈線文をもつ。

縄紋に段部が被さっていることから、縄紋原体の横位回転押捺の後に、口縁部に段を作出していることがわかる。

68は、段部に沈線文が被っている。いずれも最花A式I A類に比定できる。

69は口縁部と胴部中央付近に縄紋の加えられた隆帯が認められる。いわゆる余市式土器である。70、76は横位刺突列が数段めぐる文様が破片全体に加えられている土器である。三十稲場式土器あるいはその文様要素が入り込んだものと考えられる。71、72、73、75には、指の爪の痕が良好に残っている。

四 B地点出土土器の系統関係

以下では、上記の標本のうち、中期末から後期初頭の土器の系統関係について検討したい。B地点出土土器は「30-55cm」及びその付近のレベルが記されたラベルとともに保管されていた破片から復元されたものが多く、それらは焼土層よりも上部つまり貝層の上半にあたる部分から出土したのと考えられる。円筒上層式土器、最花A式土器の多くは、それよりも下の層位から出土したと考えられる。

B地点出土土器の1、11、46、47に加えられていた、磨り消し縄紋に伴う沈線屈曲部の扁平貼付文や、30、39の器形や段・把手の装飾の特徴は、編年研究にあたって重要な指標の一つと考えられる。大木10式(新)にも、多くの場合、刺突文列とともに、胴部に同様の貼付文(「ヒレ状」「ノ」字状文)(森二〇〇八、三六六頁)が認められるため、前者は、大木10式(新)との関係が想定できる。また、後者は、大木10式(新)の両耳付壺形土器(森二〇〇八、三六六頁)との関係で成立したと考えられる。最花A式II類の系統を引く可能性もあるが、その系統下にある大木10式(古)並行の土器は認められない。B地点出土土器は、後期初頭の大木10式(新)並行の未命名型式が量的に主体をなしていると評価できる。

一方、大曲1式とした24、28は、磨り消し縄紋手法は採用されていないものの、大木10式(古)の文様モチーフの影響が認められる。29も、最花A式の後続型式と考えられ、大木10式(古)並行である。こうした若干の大木10(古)式並行の型式にも注目しておく必要がある。

文様帯に目を向けると、B地点出土の大木10式(古)並行の土器には、I文様帯が認められない。一方で、大木10式(新)並行の土器には、10、11にI文様帯の「再

生」(山内一九六四、一五七頁)を認めることができる。それだけでなく1、2、6、7の口縁部突起付近の装飾を、I文様帯の「再生の萌」(山内一九六四、一五七頁)とすることもできる。

最花A式には、I文様帯の残存が特徴であるが、大木10式(古)並行の大曲1式や29の未命名型式では段が認められなくなる。したがって、大木10式(新)並行の10や11、あるいは1、2、6、7における痕跡的なI文様帯は、最花A式からつづくものとは考えられず、その成立の背景が課題となる。

先述のとおり、B地点出土土器には、北海道南部のいわゆる余市式土器と北陸の三十稲場式(古)土器とが認められる(註二)。これらの型式の存在は、大木10式(新)並行期の東北地方北部の土器型式が、北海道南部、北陸までの広範囲に及ぶ、複数の系統と交錯することが可能な状況であったことを物語る。ここで注目されるのは、余市式土器や三十稲場式土器の口縁部に、I文様帯としてとらえられる文様が存在することである。

余市式の初段階は、口縁部に段状の隆帯をもつことが一つの特徴であり(工藤二〇〇八、五二七頁)、B地点出土の胴部に文様をもたない土器にも、類似した口縁部

隆帯が認められるものがある。ただし、文様をもつ土器にはこのような段は認められない。B地点の胴部に文様をもたない土器は、最花A式の系統以外に、こうした余市式との関係により成立した可能性が考えられる。

一方、三十稲場式の深鉢形土器は、蓋とセットで出土することが多く、蓋を受けるための形状に口縁部がつくりだされており、口縁部の段部と段間を縦につなぐ橋状把手とが特徴である。最花貝塚遺跡からは蓋は出土していないものの、B地点から出土した、口縁部と胴部との間に段部をもつ土器は、大木10式(新)との関係の他、三十稲場式との関係も考慮しておく必要がある。もちろん、大木10式(新)の両耳付壺形土器・蓋形土器も(森二〇〇八、三六六頁)、三十稲場式との関係で成立したものと考えることができる。

大木10式(古)や大曲1式、さらには加曾利E5式と、I文様帯が「消失」あるいは非常に痕跡的となる時期にあっても、北海道南部や北陸の型式土器には、I文様帯が継続していた可能性が高いのである。

近年、三十稲場式土器は三期に細分され、それぞれ「称名寺式中段階」、「称名寺式中段階から新段階」、「称名寺式最終末から堀之内1式中段階」に並行するとされ

ている(石坂二〇〇八)。しかし最花貝塚遺跡B地点出土の大木10式(新)並行型式土器は「三十稲場式2期」(石坂二〇〇八)に比定される土器との関係が想定できるため、石坂氏の理解よりも時期の遡る関東地方の型式と三十稲場式とが並行する可能性がみえてくる。

このように、文様帯を基盤として縦横の型式連鎖の構造を確認していくことができるわけであるが、最後に、B地点出土土器と最花A式との関係にもふれておきたい。

まず器形に着目すると、A地点出土I類土器よりも長胴化が認められる。また、縄紋原体の回転方向として、A地点出土土器は基本的に横位回転であった。一方で、B地点出土土器には横位回転や同一個体に縦・横位が混在するものなどもみられるが、縦位回転のものが比較的多く認められる。さらに、A地点出土土器に認められなかった磨り消し縄紋手法が、B地点出土の文様をもつ土器の多くに認められる。A地点出土土器は固有の製作工程にもとづく製作システムでつくられたひとまとまりの土器といえたが、B地点出土土器からはそうした一定の製作工程はみいだせない。

このように相違点の多い最花貝塚遺跡A地点出土土器とB地点出土土器とであるが、若干の共通点があること

にも目を向けておく必要がある。たとえば、細かな技法の特徴として、B地点出土土器はいずれも粘土紐は外傾接合であり、これはA地点出土土器の特徴でもある。

最花貝塚遺跡A地点からは、製作工程を含めた技法、形態、装飾に固有の特徴をもつ最花A式が、他型式を伴わずにまとまって出土していた(安達二〇〇九)。一方で、B地点からは、縄紋時代後期初頭の東北地方北部の型式が、並行期の北海道南部の型式のみならず北陸の型式とともに出土していることが明らかになった。さらに、こうした他地域の型式に比定できる土器を除いても、B地点出土土器の特徴には、最花A式にみられたような斉一性があるとはいえず、種々の、主に視覚的要素に、複数の地域の型式土器の系統の交錯が認められる。

B地点からは、最花A式からの要素を細々と引き継いだ型式、北海道南部、東北地方中南部、北陸の各並行型式と、多くの型式の要素が入り混じった文様をもつ土器が出土していた。こうした状況は、最花貝塚だけでなく、この時期の周辺遺跡にも認めることができる。こうした広域にわたる複数の系統の交錯により型式が成立していることも、これまでの土器型式編年研究が混乱していた要因の一つ、ということができる。

つまり縄紋時代中期最末から後期初頭にかけての下北半島では、広い範囲にわたる地域間流通の活性化が想定できることになる。こうした中期最末―後期初頭の広範囲に及ぶ系統の交錯については、日本列島レベルでは、これまでも一部の研究者が指摘してきた。具体的には、関東より西側では中津式（千葉二〇〇四）、関東では称名寺式の展開があり（加納一九八六、鈴木徳一九九三）、三十稲場も関東から東北に展開する（阿部二〇一二）。今回、大曲Ⅰ式や、それにつづく未命名の諸型式の展開を整理したことにより、東北地方北部においても、そうしたダイナミックな系統の交錯があったことを指摘できたわけだが、そこに、三十稲場式と余市式が含まれていたことは注目に値する。多系統の交錯する時期にあつては、人工物に特有の横の「系統」関係に一層の注意を向ける必要がある。

おわりに

土器型式編年研究においては、できる限り全体との関連を問いながら、研究を進めることが重要である。とくに広範囲にわたる地域の型式の系統が交錯する縄紋時代中期末―後期初頭の研究においては、隣接地域のみなら

ず全国の各地の型式序列との対比を可能にする全体を見る眼がより重要になってくる。今後は、より一層広範囲の土器型式を視野に入れた研究を進めていかなければならない。

一方、こうした型式編年整備とともに、居住、生業など人間の諸活動形態の変遷を具体的に描き出すことも忘れてはならない。たとえば青森県内においては、後期における「集落規模の縮小と分散」化が指摘されている（関根二〇一三）（註三）。下北半島に所在する最花貝塚遺跡は、中期から後期にかけて継続した、比較的稀有な集落遺跡であるが、土器からみると、単純に継続したわけではなく、この時期に東北地方南部や北陸さらには北海道南部まで広域に地域間のネットワークが拡大していたことが伺われたわけである。こうした地域間ネットワークが、集落の継続とどのように関係していたかの解明が重要な課題となるはずである。

それに対して、津軽半島に所在する中の平遺跡では、中期後葉から後期初頭への集落の継続が認められない。中期後葉から後期初頭にかけての最花貝塚遺跡からは住居址や貝塚などの遺構が検出され、土器・石器の他に土錘やキノコ型土製品なども出土しているが、中期後葉の

中の平遺跡からはそうした遺構や遺物は検出されていない。下北半島を中心に分布する最花A式土器出土遺跡と津軽半島中心の中の平皿式土器出土遺跡とに認められる居住・生業システムの差と、集落の継続性には、当然ならんかの関係があると考えるべきである。そして、そこに土器型式にみられた地域間ネットワークのあり方を加味することで、土器型式の研究と居住・生業システムの研究とを統合していくことが重要である。

【謝辞】

長年ご指導賜りました、慶應義塾大学民族考古学研究室 安藤広道先生、佐藤孝雄先生、杉本智俊先生、山口徹先生に篤くお礼申し上げます。本稿作成にあたって多くのご助言を賜りました、総合地球環境学研究所 羽生淳子先生に深謝申し上げます。また、下記の方々にご協力、ご助言いただきました。記して深謝の意を表します。

安齋正人（東北芸術工科大学）、佐藤雅一（津南町教育委員会）、小林徳（長岡市教育委員会）

註

(一) 最近では「大曲1式」土器を含むかたちで、中期末から後期初頭にかけて型式比定の困難な土器は一括して、「大木10式併行土器」と呼ばれている（小保内二〇〇八）。

「大木10式併行土器」のなかには、主に馬淵川・新井田川流域の二つの遺跡から出土した「大木10式」土器が、それぞれ「古相」「新相」として提示され、「中相」として陸奥湾南岸および津軽半島の遺跡から出土した土器が示されている。諸型式土器の各形質の時期的変遷が、他地域の型式序列との対比とともに、十分検討されているわけではないことから、地域差が時期差として提示されている可能性が高い。

(二) 三十稲場式土器は、報告されている限りでは本例が最北の出土事例となる。ただし北海道に目を向ければ、知内町湯ノ里1遺跡や、戸井町戸井貝塚遺跡などいくつかの南部の遺跡からも、三十稲場式と同様あるいは類似の刺突文列をもつ土器が出土している。

(三) 後期における集落の立地場所が「低地から山間部まで拡大」することが指摘されている。

引用・参考文献

阿部昭典 二〇一二「縄文後期初頭における集落構造・住居形態の変容と地域間関係」『三十稲場式土器文化の世界』新潟県・津南町教育委員会、信濃川火焰街道連携協議会 七九―九〇頁

安達香織 二〇〇九「青森県最花貝塚遺跡A地点出土土器の分析」『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』平成一八―二〇年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書（代表 安藤広道）慶應義塾大学文学部民族考古学研究室 一〇―二九頁

安達香織 二〇一三「縄紋土器の技法と型式―最花貝塚遺跡A地点出土土器の製作工程」『古代文化』第六五巻第二号 財団法人古代学協会 一四―三四頁

安達香織 二〇一四「文様の構造と系統からみた東北地方北部縄紋時代中期後半の土器型式編年」『古代』第一三二号 早稲田大学考古学会 一―二五頁

安達香織・安藤広道 二〇〇九「最花貝塚遺跡の調査と最花式土器」『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』平成一八―二〇年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(代表 安藤広道) 慶應義塾大学文学部民族考古学研究室 一〇一―一一一頁

安齋正人 二〇一二『気候変動の考古学』 同成社

安齋正人監修 二〇一二『東北地方における中期／後期変動期・4・3 kaイベントに関する考古学現象①』 東北芸術工科大学

安齋正人監修 二〇一三『関東甲信越地方における中期／後期変動期・4・3 kaイベントに関する考古学現象③』 東北芸術工科大学

安藤広道 二〇〇九「最花貝塚遺跡 1964年発掘調査の概要」、『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』平成一八―二〇年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書(代表 安藤広道) 慶應義塾大学文学部民族考古学研究室 五一―九頁

石坂圭介 二〇〇八「三十稲場式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 六一―八二頁

青森県最花貝塚遺跡B地点出土の縄紋土器

江坂輝彌 一九五八「余白録古いノートから―青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より―」『石器時代』第五号 石器時代文化研究会 六八頁

江坂輝弥 一九六九「青森県むつ市最花貝塚」『日本考古学年報』第一七号 誠文堂新光社 七六頁

小保内裕之 二〇〇八「陸奥大木系土器(榎林式・最花式・大木10式併行土器)」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 三六八―三七五頁

金子浩昌 一九六七「下北半島における縄文時代の漁業活動」『下北―自然・文化・社会―』平凡社 一一七―一二八頁

金子浩昌・牛沢百合子・橘善光・奈良正義 一九七八「最花貝塚第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告』第四集 むつ市教育委員会 一一五―二頁

金子浩昌・橘善光・奈良正義 一九八三「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告書』第九集 むつ市教育委員会 三六―一六八頁

加納実 一九八六「中津貝塚出土土器の抱える問題点」『千葉県埋蔵文化財センター研究連絡誌』第一八巻 六一―三頁

工藤研治 二〇〇八「北筒式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 五二―五二九頁

小林達雄監修 二〇一二「三十稲場式土器文化の世界」新潟県・津南町教育委員会、信濃川火焔街道連携協議会 佐々木守 一九五一「下北半島先史文化総合発掘調査」『みちのく』第三号 県立大湊高等学校考古学部

五九七 (五九七)

鈴木克彦 一九七五「中の平遺跡における円筒土器以後の

編年の考察」『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県教育

委員会 一七八—一八九頁

鈴木克彦 一九九四「大曲1式土器」『縄文時代研究事典』

東京堂 二四〇頁

鈴木克彦 一九九八「東北地方北部の縄文中期後半の土

器」『研究紀要』第三号 青森県埋蔵文化財調査センター

一—五六頁

鈴木克彦 二〇〇一「北日本の縄文後期土器編年の研究」

雄山閣出版

鈴木克彦 二〇二三「北日本縄文後期土器集成」 弘前学院

出版会

鈴木徳雄 一九九三「称名寺式の変化と中津式—型式間交

渉の一過程—」『縄文時代』第四号 縄文時代文化研究会

二一—五一頁

関根達人 二〇一三「津軽の縄文時代—亀ヶ岡文化を中心

に—」『日本第四紀学会講演要旨集』第四三三号 第四紀学

会 一五八—一五九頁

高橋潤 一九八八「北部東北地方の縄文中期終末に於ける

土器編年試案(1)」『燃糸文』青森県山田高等学校考古

学研究部 二二—二七頁

橘善光 一九九四「縄文時代中期最花貝塚の時代」『むつ市

史原始・古代・中世編』むつ市 一五六—二八一頁

橘善光編 一九八六「最花貝塚第4次調査報告」むつ市教

育委員会

橘善光・奈良正義 一九八〇「最花貝塚第2次調査報告」

『むつ市文化財調査報告書』第六集 むつ市教育委員会

一—七二頁

千葉豊 二〇〇四「中津式—研究史と課題—」『中津式の成

立と展開』中国四国縄文研究会 七三—八四頁

成田滋彦 一九八四「東北北部の大木10式土器の周辺—青

森県の事例を中心に—」『奥南』第三号 奥南考古学会

一九—三二頁

松島義章・奈良正義 一九八八「下北半島田名部平野沖積

層から産出した貝殻のC14年代とそれに関する問題」『神

奈川県立博物館研究報告』第一七号 神奈川県立博物館

五七—七二頁

松原彰子 二〇〇六『自然地理学』慶應義塾大学出版会

松本秀明 一九八四「海岸地形にみられる浜堤列と完新世

後期の海水準微変動」『地理学評論 Ser. A』第五七

卷第一〇号 日本地理学会 七二〇—七三八頁

村越潔 一九七四「第四章 円筒土器の型式と編年 第三節

円筒上層式土器、第四節 円筒上層式直後の土器」『円筒

土器文化』雄山閣 九三—一二三頁

森幸彦 二〇〇八「大木9・10式土器」『総覧 縄文土器』

アム・プロモーション 三六〇—三六七頁

柳澤清一 二〇〇六「縄紋時代中・後期の編年学研究—列

島における小細別編年網の構築をめざして—」平電子印

刷所

山内清男 一九二八「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第四

三卷第一〇号 東京人類学会 四六三—四六四頁

山内清男 一九二九「關東北に於ける織維土器」『史前學雜

誌」第一卷第二号 史前學會 一—三〇頁

山内清男 一九三〇「斜行縄紋に關する二三の觀察」『史前
學雜誌』第二卷第三号 史前學會 一三一—二五頁

山内清男 一九三二「日本遠古之文化——縄紋土器文化
の真相——」『ドルメン』第一卷第四号 岡書院 四〇—四
三頁

山内清男 一九三六「日本考古學の秩序」『ミネルヴァ』第
一卷第四号 甲野勇・東條英治 一—一〇頁

山内清男 一九三七「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考
古學』第一卷第一号 先史考古學會 二九—三三頁

山内清男 一九六四「縄文式土器・総論 V 文様帯系統
論」『縄文式土器』日本原始美術第一卷 講談社 一五七

—一五八頁